1997.5.2

尼崎市立小園中学校 第2学年 社会科通信

なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠

No. 7

縄文早期前半 道2本、住居46基

9500年前の集落

国内最古「三内丸山」より4000年古く

鹿児島・上野原遺跡

鹿児島県国分市川内の上野原遺跡で、約9500年前（縄文時代早期前半）の集落跡が見つかった。県立埋蔵文化財センターの26日の発表によると、1・5㌶の調査区域から南北に並行して延びる2本の道と、その周囲に散在する住居や炉跡とみられる石組が多数出土、「日本列島最古の"村"」としている。縄文の大規模集落で有名な青森市・三内丸山遺跡より4000年古く、列島に集落が出現するのは縄文前期（約6000年前）からとしてきたこれまでの通説も覆している。同時期の集落跡は朝鮮半島にもなく、東アジアの古代史上、注目すべき遺跡として大きな関心を集めそうだ。

（10、11面に関連記事）

鹿児島・上野原遺跡で見つかった9500年前の村の跡＝同県国分市川内で26日午前9時、本社ヘリから、川田雅浩写す

同センターによると、出土したのは竪穴住居跡46基▽食料を蒸し焼き調理した炉跡などとみられる石組（集石）39基▽薫製用の炉として使った穴（連穴土坑）15基▽食料貯蔵などに使用したとみられる穴（土坑）1225基▽土器片や石器5000点以上。

住居跡は小さいもので2・1×2・1㍍、大きいもので4・5×2・4㍍の方形。深さ20～30㌢。周囲に直径20～30㌢の柱穴が4～11個ある。うち13基は同じ火山灰で埋まっており、これらは同時に建っていたと推定できる。道は踏み固められたもので国内最古級。国学院大の小林達雄教授は「定住生活がほぼ軌道に乗ったころの暮らしぶりを伝える遺跡」と評価している。

遺跡の年代は火山灰層で確定。遺構や遺物は、桜島が出現した際の噴火に由来する約1万1500年前の火山灰（薩摩火山灰）と、約

上野原遺跡の住居跡などの分布図

上野原遺跡　弥生中期から縄文早期前半（2000年前～9500年前）の主に集落跡からなる複合遺跡。標高約250㍍の台地上にあり、同県教委が工業団地造成に伴い1992年から緊急調査。ほぼ完形のつぼ形土器や土偶、耳飾りなど縄文時代早期の遺物が豊富に見つかっている。

9500年前の火山灰には桜島平式（円筒形平底で貝がら文がある縄文土器）のみで、集落の存続期間はこの形式が使われた期間（2000～3000年）と同程度とみられる。【居垣 隆弘】

朝鮮半島含め最古

国立歴史民俗博物館の佐原真・副館長の話　おそらく朝鮮半島から日本列島の範囲で一番古い定住集落だろう。（当時の集落の様子を考える上で）多数ある竪穴住居がどの程度、同時期にあったか、分析結果が待たれる。この時代、定住化が南九州だけに限られたことなのか、本州にも及んでいたかが、今後の検証課題になるだろう。

毎日（大阪）1997.5.26（月）夕刊

火山灰に消えた南の文化

9500年前「最古の村」

縄文早期 南九州に人口集中

1万年近く昔の村が丸ごと出てきた――。鹿児島県立埋蔵文化財センターが26日発表した上野原遺跡（同県国分市）の集落遺構。ここで人々が暮らした時期は最終氷期が終わってほぼ2000年後。人類は洞穴生活を捨て、氷河に代わって現れた森や草原を舞台に集落づくりを始めていた。時を超えて火山灰の下から現れた「最古の村」は今に何を伝えるのか。

【居垣隆弘、高原克行】

上野原遺跡は桜島と霧島を望む台地の上にある。井戸跡はなく、台地下のわき水をくみに行っていたとみられる。生活遺跡は、通常狩猟などでできることはなく、鹿児島大の上村俊雄教授は「水場などいつも同じところに通ううちに踏み固められてできた」と話す。

食料は何か。狩猟具こそ出土していないが、肉を薫製にする連穴土坑、石皿やすり石、たたき石など主に木の実を粉にする石器が見つかっており、森の恵みに頼っていたと推測できる。森で獣を追い、木の実を集め、炉とみられる集石遺構で調理。余った肉は薫製に加工。木の実も穴の中に保存――遺物と遺構からそんな暮らしが想像できる。

桜島の灰は、当時から住人にとって悩みのたねだったらしい。1500年も続いた青森市・三内丸山遺跡の村に比べ、上野原の縄文の村は比較的短い期間で放棄されており、火山災害の影響をうかがわせている。

落葉広葉樹が支えに

「国立民族学博物館の小山修三教授による縄文時代の人口動態推計では、縄文早期の九州の人口密度は東北地方の1・6倍、近畿・中国・四国の5倍と、集住が進んでいた。国学院大の小林達雄教授は「南九州は草創期（約1万2000年前）から特に人口が集中して活気があり、先進的動きを示している」と言う。鹿児島県加世田市・栫ノ原遺跡で見つかった草創期の集石遺構群もその一例だ。そんな「南九州の先進性」を支えたのは落葉広葉樹林とされている。

鹿児島県考古学協会の河口貞徳会長は「1万年前ごろの南九州は、コナラの実が出土しているように、落葉広葉樹林が茂っていた。遺跡も150を超える。ところが7000年前ごろから始まる急激な温暖化（平均気温が現在より2度高く、海面は平均5㍍高い＝縄文海進）で、落葉広葉樹林は照葉樹林に変わり、遺跡も30台に激減する」。これに火山災害も加わって、南の縄文文化は衰退したとみられている。

来月1日現地説明会

鹿児島県立埋蔵文化財センターは、6月1日午前10時から午後4時まで現地説明会を開く。

◇縄文時代の世界◇

1万2000年前	最終氷期の終末。縄文土器誕生。
1万1500年前	桜島出現。その噴火による火山灰が南九州から西日本に降り積もる。
1万年前	西アジアで農耕。西ヨーロッパ・北アフリカで狩猟採集用の細石器普及。
9500年前	上野原遺跡。西アジアに城壁のある大規模集落。
7000年前	中国・長江流域で稲作＝河姆渡（かぼと）遺跡など。
6300年前	屋久島北方で大爆発（鬼界カルデラ）。火山灰が南九州から四国に降り積もる。このころ縄文海進のピーク。
5500年前	三内丸山遺跡での定住開始。
4500年前	世界4大文明のぼっ興、繁栄期。
2500年前	北部九州で稲作＝弥生時代前夜。